

路福島へ。久しぶりに充実したいい山行であった。

(記・.....)

1984年9月14~16日

タカツコ沢

L

3

9月14日 曇り一時雨。 福島(16:00)→御沢(21:40)

夕方に福島を発って、喜多方経由で川入～御沢へと入る。

9月15日 曇り後晴。積雪はガスがかかる。 御沢(6:30)→タカツコ沢出合(7:05)
→穴沢出合(8:00)→剣ヶ峰(15:40)→三国岳(16:15)

朝6時半に御沢を出発する。砂防ダムまで林道を歩き、砂防ダムを乗り越えて沢に入る。タカツコ沢出合へは御沢から30分程で到着。いよいよ進行開始である。

河原を遡んでゆくと、やがて釜のある小滝F₁4mが出てくる。なんなく越える。この先再び河原。沢が二分する部分もあるが、上部で合流する。

右岸からドンガ沢が入り、8時、穴沢との出合となって、本流は左に曲がる。核心部はここからで、さっそく5m、4mと滝が出てくる。

沢が再び二分し、すぐに再合流すると、間もなく大きな幅広いF₂8mが現われる。中ほどを直登し、左岸にトラバースして登る。その上は小滝が連続していた。左岸から小沢が入った先のF₃6mを越し、その上の3mのすべりやすいチョックストンの滝は、トップが登ってザイルを出す。

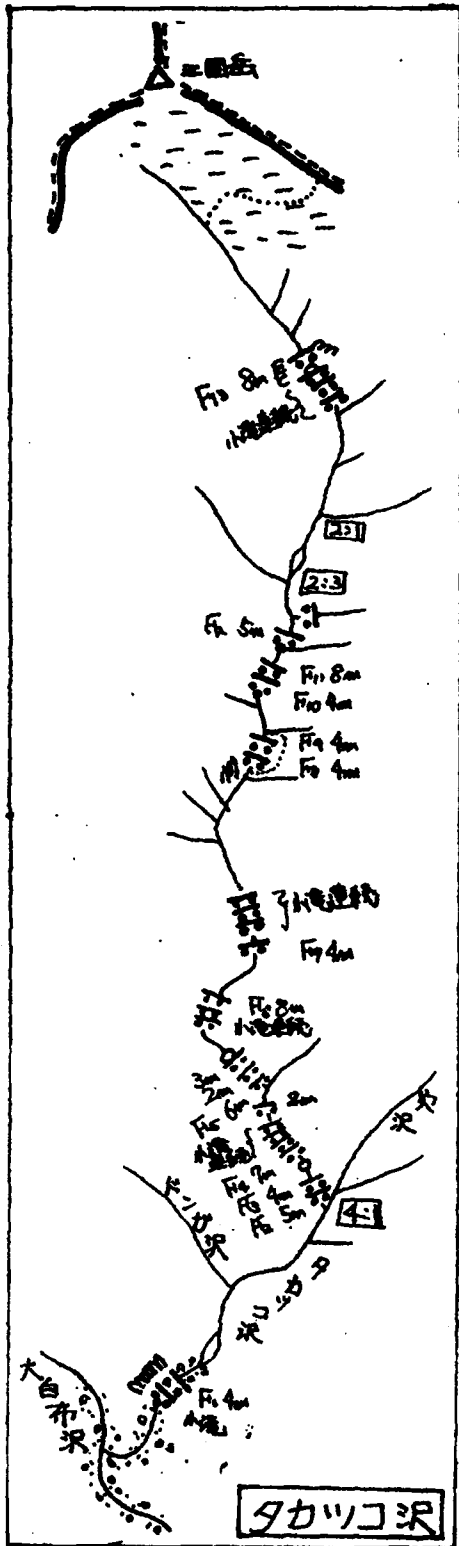
沢が右に直角に曲がると、小滝が連なる連瀑帯となって、一気に高度をかせぐ。そしてナメ状の斜瀑であるF₄8m。右岸のブッシュを利用して登る。

F₁4mを過ぎると、再び2m程の小滝が連続するようになる。3つめの小滝は、深い釜をもっていたので、へつりで通過する。

やがて右岸から3本の小沢が入り、四角にくりぬいた特徴ある岩が出てくる。ここで小休止をして、再出発。すぐにF₅F₆各4mとなり、この沢唯一の掃きを強いられる。2つの滝を一変に掃き、ブッシュを利用して下降する。

F₇4m、F₈8m、F₉5mのそれぞれ釜をもつ滝を乗り越えると、沢は河原状となって、ややホッとした気分になる。やがて二俣。水量は2:3出、本流である右俣の方が多し。右俣には岩に赤ペンキで丸が書いてあった。

沢が一度二分して再合流した先にまた二俣。左沢が本流で、水量も倍くらいある。右沢は、本流と少し並行して流れているが、やがてカーブをきって瀬頭に上がってゆく。



12時25分、小滝の続く連続瀑となる。一度に高度をかせぐ連続瀑の最後は、5mのチョックストンの滝となっていて、トップが空身で岩の間を直登し、ザイルを出す。セカンドからはザックを背負って登るが、スタンスが悪く、ザックが引っかかり引き上げてもらう者も出た。

次に最後の滝F_{1.8}mが出てくる。中央に一本の糸を引いただけのもので、滝というより壁といった感じである。直登はできそうもないので、右岸の岩場を登ることにする。トップがザイルをつけて、ランニングビレーをとりながら20m直登し、右に10mのトラバースをして乗り越える。5人全員顔を合わせたのが、15時、この滝で1時間以上ついやしてしまふ。

もう瀧頭の様相である。右手にスラブが出てきたので、剣ヶ峰めざしてスラブをフリクションで直登し、バンドを右にトラバースして後縁に出る。ガスの中から後縁の登山者が確認できた時には、さすがにホッとす。

15時40分後縁到着。水を補給し、三國小屋には16時15分に着く。

9月16日 三國小屋(7:30)→地蔵山(8:30)
→御沢(10:30)→福島(16:30)

7時半までのんびりしてから三國小屋を出る。剣ヶ峰を通過して御沢に下り、一路福島に向かう。充実した沢登りをやったという興奮と、安堵感、それに心地よい疲労感が体の中を駆けめぐっていた。

(記)